



Title	シンポジウム「オリンピックとデザイン：1964年東京オリンピックを中心に」
Author(s)	鈴木, 禎宏
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 105-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56320
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シンポジウム

「オリンピックとデザイン：1964年東京オリンピックを中心に」

司 会：鈴木 禎宏（お茶の水女子大学）

発表者：安城 寿子（服飾史家）

伊村 靖子（国立新美術館）

木田 拓也（東京国立近代美術館）

新名 謙二（お茶の水女子大学）

シンポジウム趣旨

今年（2014年）、冬期オリンピックやサッカーのワールドカップ等のメガスポーツイベントが相次いで開催される中、日本は1964年の東京オリンピック開催から50周年を迎えた。一般にオリンピックが開催されると開催地の社会・文化は何らかの変容を遂げることになるが、それは1964年の東京の場合も例外ではなかったし、またデザイン諸分野——グラフィックデザイン、建築、服飾等々——も例外ではなかった。本シンポジウムでは「1964年東京オリンピック」を切り口として、1960年代におけるデザインのあり方を多角的にふり返ることを試みた。

その際の問題意識として、方法論的な反省がある。イギリスの *Journal of Design History* 誌は2012年にオリンピック特集を組んだが、その中で責任編集者ジリー・トラガヌはオリンピックに関わるデザインの歴史記述がおよそ四つの研究分野で行われていることを指摘した。すなわち、（1）デザイン史・建築史、（2）オリンピック研究、（3）都市計画研究、そして（4）メディア研究である（Jilly Traganou, “Forward: Design Histories of the Olympic Games”, *Journal of Design History*, 2012, 25 (3), pp. 245-51）。この分類で言えば意匠学会は（1）に関わるが、しかし（1）の内部でも歴史記述のあり方は多様である。また、（1）の立場から見た場合、「スポーツ」という視点は新しい光を既存のデザイン・建築史に投げかけるかもしれない。

こうした諸デザイン史間の連続性や不連続性を、「1964年」「オリンピック」というキーワードによって露わにし、かつ個々の事象への理解を深めることが、今回のシンポジウムの眼目である。開催校から招いた新名謙二氏は、スポーツ研究の立場からオリンピックの歴史を概観した。その後木田拓也会員が東京オリンピックにおけるデザイン戦略について、勝見勝に注目して論じた。伊村靖子会員は当時の美術界とデザイン界の関係について論じ、オリンピック終了後から大阪万国博覧会までの時期を繋いだ。安城寿子会員は日本選手団の制服の変遷について、デザイナーや生産業者などの視点から実証的に論じた。（お茶の水女子大学 鈴木 禎宏）